

## ひふみ神示8 地震の巻き8帖より サブタイトル霊界と現界の繋がり

今まで読んでいただいた皆様には下記の内容判るのではないかと思います。よく味わって下さい。

### その27

総てのものは歓喜に向かい、歓喜によりて行為する。歓喜がその目的であるが故に、歓喜以外の何もかも意識し得ない。故に歓喜よりはなれたる信仰もなく、真理はなく、生命はない。生前の霊人が地上人として生まれてくるのも死ではなく、地上人が霊界にはいるのも死ではなく、弥栄なる誕生であることを知らねばならぬ。

歓喜は行為となる。行為せざる歓喜は、真実の歓喜ではない。只考えたり意志するのみでは萌え出ない。生命しない。ただ意志するだけで行為しないことは、まことに意志することではない。霊界の於いては意志することは直ちに行為となるのである。地上人ありては物質によりて物質の中に、その意志を行為することによって初めて歓喜となり、形体をなし栄えるのである。

生前の霊界は、愛の歓喜、真の歓喜、善の歓喜、美の歓喜の四段階と、その中間の三段階を加えて七つの段階に先ず区別され、その段階に於いて、その度の厚薄によりて幾区画にも区分され、霊人の各各は、自らの歓喜にふさわしい所に集まり、自らの一つの社会を形成する。自分にふさわしくない環境に住むことは許されない。否苦しくて住み得ないのである。

若しその苦に耐え得んとすれば、その環境は、その霊人の感覚の外に遠く去ってしまう。例えば、愛の歓喜に住む霊人は、その愛の内容如何によって同一方向の幾百人か幾千、幾万人かの集団の中に住み、同一愛を生み出す歓喜を中心とする社会を形成する。

故に生前世界では、自分の周囲、自分の感覚しうるもの悉くが最もよく自分に似ており、自分と調和する。山も川も家も田畑も、そこの住む霊人たちも、総て自分と同一線上にあり、同一の呼吸、同一の脈拍の中にあり、それら総てが、大きな自分自身と映像する場合が多い。自分は他であり、他は自分と感覚する。故に、その性質は生後に基づき、地上人もその周囲を自分化しようとする意志を持っているのである。

しかし地上世界は、物質的約束によって、想念のままには動かない。死後の世界もまた生前と同様であるが、一度物質界を通過したものと、しないものとの相違が生じてくるのである。

だが、いずれにしても物質界との密接なる呼吸のつながりを断ち切ることは出来ない。物質は物質的には永遠性をもたず、霊は永遠性をもつが、霊的な角度から見れば永遠性はない。

しかし、物質面よりみれば永遠性をもつものであり、永遠から永遠に弥栄してゆくもの

である。而して、永遠性をもつ事物は、地上的物質的事物を自分に和合せしめる働きを内蔵している。無は有を無化せんとし、有は無を有化せんとし、その融合の上に生命が歓喜するのである。有は無を生み出す大歓喜の根本を知得しなければならない。

・ ・ その 28 に続く